

## 平成 28 年度第 1 回高知県環境審議会自然環境部会（要旨）

日時：平成 28 年 6 月 29 日（水曜日） 13:30 ～ 16:30

場所：高知共済会館 3 階

出席者：[委員] 石川部会長、依光副部会長、多々良委員、久松委員、細川委員、松田委員、  
岩瀬専門委員、福田専門委員、前田専門委員（9 名）  
[事務局] 県林業振興・環境部 副部長、環境共生課（4 名）

### 1. 開会

#### 【事務局より開会挨拶と事務連絡】

- ・県林業振興・環境部高橋副部長から挨拶。
- ・出席委員の紹介。
- ・審議の内容は、県で定める「審議会等の会議の公開に関する指針」に基づき、ホームページで公開する。

### 2. 会議記録署名委員の指名

会議記録署名委員については、多々良委員、久松委員が部会長から指名された。

### 3. 議事

#### 議題（1）生物多様性こうち戦略の進捗状況について

【事務局より 27 年度状況報告及び 28 年度計画の概要説明及び事前質問への回答:資料 1、2、3、4 に基づく説明】

・【資料 1】の項目リストは、こうち戦略 97 項目のうち、今回検討していただく 35 項目について示している。（平成 28 年 2 月開催の自然環境部会で絞られた重点項目 28 項目以外に委員からご意見があった項目【資料 3】を含め、全部で 35 項目）。その 35 項目について、【資料 4】に沿って説明した。

～説明を終えて、質疑応答～

#### ●プラン 1 について

「プラン 1 取組 2、行動計画③ 7 ページ」

（岩瀬専門委員）

県立の生涯学習施設は、（行動計画③に出ている施設）の他にも、例えば、足摺海洋館や海底館とかいろいろあるので、網羅して欲しい。また、美術館や歴史博物館でも、おそらく関係したいろんな取組はあると思うので、網羅していただきたい。

### ●プラン2について

「プラン2 取組2、行動計画⑤ 7ページの一番下」

(岩瀬専門委員)

豊かな環境づくり総合支援事業は、去年利用者が少ないということでいろいろ話があったので、今回私の方からいくつか提案を出させていただいた。

(事務局：内村課長)

今年第1回目の募集に4つ新規応募がきた。全体で12件ほどきて、2件不採択のところがあった。そこは岩瀬委員の「ただ不採択するのではなしに、手を差し伸べるようなヒントを与えて、次の応募に活かせるように」という意見を踏まえ、こちらも工夫をしていく。

また、プレゼンテーション10分のために、遠方から高知県庁に来るのは大変というご意見については、やはり面と向かって訪問したほうが熱意も伝わるし、組織体制の充実等もあるので、難しいところがある。ただ、似たような事業が県庁各課にたくさんあるので、審査方法を調査いたしましてベストのやり方を検討していきたいので、少しお時間をいただきたい。

「プラン2 取組2、行動計画⑥ 8ページ」

(岩瀬専門委員)

協働の海づくりの制度ができてから1件も協定の締結がないので、何とか取り組みをして欲しい。

(事務局：内村課長)

是非、頑張りたい。

### ●プラン3について

「プラン3 取組1、行動計画③ 8ページ」

(依光副部長)

自然環境の保全と回復を図るという大枠のなかで、すぐれた自然環境の保全と管理の取組について、河川課の「放置船及び沈廃船の対策計画の策定」しかないのは、なぜか。

(事務局：内村課長)

河川課は、「知る」とか、「守る」とか、「つなぐ」とか、いろんな場面で担当の部分があり、ここでの頭出しは、「放置船及び沈廃船の対策計画の策定」であったのだと思う。配置も考えながら検討したい。

(依光副部長)

中身も、先ほど高橋副部長から「視点」という話があったが、今は、全体的に言えば人間中心の生き物である。私が問題にしている部分というのは、自然のための自然という視点が欠けている面があるということ。そこのところをもう少しここに反映して欲しい。たとえば、生き物の繁殖環境とか、河川景観の保全・創出、つまり、多自然川づくりの中身をもっときちんと詰めていただきたい。自然のための自然の部分非常重视していただ

きたい。今、これが実はないがしろにされている。

(事務局：内村課長)

内容を反映させたい。

(石川部会長)

こうち戦略を策定する段階で項目はたくさん出たが、庁内調整の段階でかなり削られていったという経緯があった。これは、多分最終的に残った取組をここに割り振っているの  
で、消えて行った経緯をもう一度、担当課のほうに問い合わせてみないといけない。

依光副部会長は、多分それを復活させてほしいという事だと思う。それは当然この会で  
やってもいい事だと思うが、またその担当課の方との調整が必要になってくるのでしょ  
うね。強い意見があるということを投げかけないといけないが、その辺りのご意見を拾い上  
げるとするのは、どういうふうにするのか。

(事務局：内村課長)

皆様方のご意見を担当課に伝えます。

(石川部会長)

自然環境部会で揉まずに、環境共生課に出して、それを直接担当課へ持っていくとい  
うことか。

(事務局：内村課長)

はい。項目を多くして是非やってほしいと伝える。多分やっているはずなので、項目を  
1項目多くして、この4つのプランの中のどの場面がいいのかを検討していきたい。この  
部分は項目追加して、中に埋め込んでいきたい。

(事務局：宮地)

河川課の項目を増やすのか、そうではなく、環境共生課等の枠を増やすのか。

(依光副部会長)

当然両方です。

(事務局：内村課長)

では、どこに当てはめるかは決めないとはいけないが、公共工事のところはどうか。

(依光副部会長)

ここに出てくる公共工事は、アセスみたいなかたちでの「規制」とか「守る」であり、  
保護条例に基づいた「守る」ということ。私が言っているのは「守る」だけじゃなくて、「再  
生」の視点が、ほっとけば壊れていくものをどう守り、どう改善するかという「再生」の  
視点もいるということ。是非、環境共生課、場合によっては鳥獣対策課も関わってくるこ  
ともあるかもしれない。

(事務局：内村課長)

分かりました。「守る」のところの【川】の欄で検討する。環境アセス等の項目以外のも  
のでも状況を書いてほしいということですよ、流域ごとに分かると思うので、そこは取  
り組みたい。

●産業との関わりについて、行動計画を立てるにあたっての視点について

(福田専門委員)

計画の中に産業に関することが出てくる。例えば、森林経営計画が進まないとか、森の工場は進まないとか。結局、それだと産業振興計画の進捗状況の話をしているみたいで、この間から腑に落ちない感じがしていた。要するに、そういう事ではなくて、多様性の議論をしているわけだから、別の視点が必要。

例えば、森の工場、あるいは森林経営計画だと、そこに集約化・団地化という言葉が出てきて、結局はそこに道をつけよう。道をつけて木を出そうと。それで木材生産を伸ばすと。それも、確かに間接的には林業振興になって、そして山村の人が生活できるようになって、そういう意味で山のいわゆる、山で人が生きることによって森林を守れると。間接的には確かにそういうことも利点ではある。

一方、私はいつも道をつけている立場なので、その時に非常に二律背反というか、確実に自然を破壊している。良いことしているか、悪いことしているか、本当に自分で疑問に思うくらい大変なことをしている。

その視点がやはりここには必要。経営計画の進捗状況は、まったく次元の違う話。最初から項目作りが間違っているのではと思う。最初の会に来てなかったのも、この会の主旨が分かりにくい、そのあたりを今、依光先生が話した「川」のことと、私が言った「山」のことと、関係していると思う。

絶滅危惧種の話は非常に簡単で、それは守らなければいけない。ただし、産業に関することは、全く別のことを話すみたいになるので、もう少し慎重に考えないといけない。

(岩瀬専門委員)

宿毛のバイオマス発電とか大豊の製材とか、規模が大き過ぎていろんなことが起きているという話は、林業者の方からずいぶん話しが出てきている。

宿毛の話は特に、大月にとってもかなり危機的な、本当に禿山を作ってしまうような激しい伐採が行われたりもしているので。その辺をどこで話をしたらいいのかよく分からないので、是非検討していただきたい。

(福田専門委員)

プランの最後の端で、バイオマスを進めようという話がある。県が皆伐を進めることになってきているわけで、その辺りを非常に慎重に考えないと、なにをいったい私達はここで議論しているのかというのをね。もっと詰めたところからやっぱり項目を作らないと。

(前田専門委員)

農業も一緒だと思う。農業の場合は、産業振興計画とあまり変わらないということがいくつかある。「地域でこう回ればいいね」という、それが膨大なものになると禿山になってしまう。全然供給が足りない。各単一、個人農家でやる分には非常に小回りで昔ながらでいいのだけど。宿毛みたいになると、廃棄物の問題とか予算が絡む。

生物多様性を頭に入れた産業の中できちんと捉えないと、今話があったように何をやっているのか分らない。

それで、やはりグローバルな、地球環境的な、それを頭に入れながら高知の農業は産業的な考え、生物多様性というものを。やはりそれを抜かしたらとんでもない方向にいくということが常にある。

(石川部会長)

こうち戦略のこの項目を決めていくときに、環境基本計画に生物多様性に関連ある項目がいろいろあるので、流し込んでいったというプロセスがあった。その中で、一次産業も非常に重要なので、一次産業に関わるところも入れ込んだ。

ただ、産業振興計画の中で立てられた目標、数値目標があったので、関連があるだろうというものを流し込んだ。ほかにもいっぱい意見が出たけども、庁内調整の段階で、ある程度軌道にのってやっているものが残っていったという印象を持っている

当然、こうち戦略の項目立ての見直しというのは常にやっていかなければならないし、本当に生物多様性にとって重要なところの項目をもう少し絞るような作業が今後必要になってくるのかなと思う。

(依光副部会長)

生物多様性とは何かというところから、ここでは「活かす」というのがあって、いわゆる生態系サービス。自然が持っている人々に与える恩恵が生態系サービス。

森林の場合だったら、多面的機能がほとんどサービス。木材供給もサービスであるし、そういう意味で、産業＝その地域が持続しなきゃいけない地域というのは中山間地域なので、そういう意味である程度産業振興も必要。

けれども一方で、自然のための自然という生き物のためのその視点が、相当減らされている、この中からは読み取れない部分が非常に多い。どちらかというと先ほど報告された産業振興の方からの視点多い。

生態系サービスを享受する人間側と生き物とが、環境保全と生活産業とが両立するようなかたちで、進んで行ってもらいたい。

【山】を見ている、やはりそういう視点、動き、やや心配する面が出てきている。奥物部なんかへ行っている、稜線のちょっと下の方に木材生産のための長い林道・作業道がついて、それが崩れているというようなことが今起き始めているので、豪雨が来たときにどうなるだろうかと心配しているような状況がある。

ですので、そこら辺の両面を「活かす」「守る」そして「再生する」とか「循環」とか、そういうのをこれにもうちょっとうまく入ってもらいたい。

## ●こうち戦略の見直しについて

(石川部会長)

その庁内調整で、「守る」とか「活かす」というところで新たに提案したものは消されている。それを復活させるときの手続きは、ちょっとややこしいのかなというふうに私は個人的には思っているが、当然ここで再度あげて揉む必要はある。自動的にずっと環境共生課の方からそれぞれの担当課の方にお話を持っていったという簡単な話ではないような

気はする。

(事務局：三好課長補佐)

各分野、農業、水産含めて、ほぼ同じことが言える。

林業クラブや土佐町の林業研究会の方の森林というのは本当に手入れがなされていて、生態系サービスがそこから出てきている。しかし、今高知県全体の森林でそのような、健康な森林というのはごく僅か。その中で整備をしていくためには、森林経営計画等の指標を使わざるを得なかったというところが1つある。

これは、農業で、水産、または河川においても、特に、本来であれば川の持っている景観、自然環境を保全するとかいう治水という、人間視点でしか捉えられなかったというところは、残念かなと思う。

一方で、バイオマスというお話が出たけれども、本来は山を禿山にするのではなくて、一本一本の森林や樹木には、良材に使えるもの、バイオマスで使えないもの、チップ用のもの、燃料用のもの、いろんなものがある、それを仕分けして出荷をできればいいけれども、そのようなベースとなるような林業の整備が県内では進んでいないなかで、生産を上げようとしてきたところが、やはり一つ問題かなと思っている。

これを各分野で考えていくと、課題が大変多いなかで、今それぞれの分野で指標として見ていただけるものがどうしても限られてくる。そのなかで、ご議論いただいたような生態系サービスを維持しながら、各産業を中山間のほうで伸ばしていく仕組みというものを何らか見つけていく必要がある。

その指標は、今日いただいた意見等を踏まえて、何らかの設定をしていく必要がある。しかし、新たな設定し直すというタイミングでは、環境共生課だけではなかなか大変。

6年前に名古屋で議定書が発行されて、10年間という期間を環境省が設定して、愛知目標(ターゲット)を2020年に構えている。

この生物多様性こうち戦略も5年ごとに見直すという、5年ごとに計画の進捗を見ていくということで、2020年愛知ターゲットというかたちで設定した10年目というものを迎えるにあたって、新たな指標というものが必要ではないか。

これは林業に限らず、1次産業、教育の部門、またそれ以外の部門も同様に、この自然環境部会のほうで情報発信をしていただくことによって、県庁内でそういうものを発議していけないかなと思っている。

では、部会長がおっしゃられたように、これをこうち戦略立てたときどうしても落としでいかざるを得なかったところで、復活すべきところがあるのではないかと。言うなれば、それがより県民の方に生物多様性というものをご理解いただくところで必要なものがあるとなれば、それを復活するような場というものを設定する必要があるのではないかと。

それは、2020年に向けてあと3、4年しかありませんので、このタイミングの中で何らか、例えば環境審議会の全体会の中でそういうものをご発議いただいて、県全体でそれを取り組むというふうな方向性を見出せればと思っている。

(石川部会長)

2020年に当然国の方の見直しが来るので、それを受けたかたちで、また地方戦略・地域戦略の方も見直しが、上のほうからも来ると思う。自発的に中から変えようという用意もしておかないと、すぐ対応できないので、せっかくそれぞれの分野、専門家の方がおられるので、この項目立ての問題点を、やはりきちんといただいた意見なども含めて、まとめておいていただく作業が必要だと思う。

(事務局：三好課長補佐)

特に、今あるそれぞれの取組・行動計画が、直接的に生物多様性の保全や戦略というところに結び付いているものと、間接的なものというところを分けて判断する必要がある。

(石川部会長)

今の提案でよろしいか。

(他委員)

同意

(石川部会長)

その辺りを、自分の専門分野のところだけでも結構ですので、お考えをまとめておいていただいたらありがたい。

#### ●具体的な提案を救い上げる場について、情報発信の場について

(細川委員)

進捗状況の資料を見ても、どこでどんなことが起きているのか私たちには全然具体的に見えてこない。実際、私はフィールドに行って、これはまずいなという問題があるが、それをどこにあげたらいいのか分からない。そのネットワークづくりをきちんとしておかないといけない。

例えば、高知市で今工業団地に整備している場所で、平らなところはいいですけど、法面の斜面のところはやはりいろいろな植物が復活しているので、公園みたいな誰でも、なにか活かせるような開発はできないものかと、再々私は言っている。

牧野でも言ったけれども、牧野では「しょっちゅう言わんといかんで。担当が変わったらゼロになるから、言い続けてください」と言われる。牧野が分かっているのに、それでどんどんその意見は全部消されていっている。

だから、そういった意見をどこで救い上げるか、そのシステムを作らないと。

(石川部会長)

そういう具体的な提案とかご意見をあげるべきところは、こういう場しかない。意見を上げていただかないと、せっかく集まってもらっているこの会議の意味もないので。

(細川委員)

リーダーとかそんな人から、具体的な問題があがってくるので、それをどのように活かしていくかを、きちんと役割決めをしていかないといけない。

(石川部会長)

そうすると、この自然環境部会でも進捗管理の会だけではなくて、新たな見直しとか構

築とかいうことを考える会を持たないといけないということになりますか。

(事務局：三好課長補佐)

今お話しいただいた件については、やはり皆さん現場の状況がなかなか見えにくいというの、まさしくおっしゃる通り。

例えば、先ほどお話があった工業団地の植生、一次植生だけではなくて二次植生もあると思うが、今現時点では二次植生であってもレッドリストに載ってくるような植生が大変多い。それを多くの方に知ってもらおう仕組みというのが、なかなか無いのではないかというの、おっしゃる通り。これも今後の検討課題、どういう形にもっていけるのかというの議論する必要がある。

例えば、先ほど課長が報告しましたソーシャル・ネットワーキング・サービスであったり、横の繋がりということであれば、四国の生物多様性ネットワークの皆さんが年 1 回いろいろとフォーラム、イベントを開催されているなかで、県内各地でどういうことが起こっているのかというものを発表する機会をご提示いただいている。

ですから、やはりこの今回の生物多様性こうち戦略というのを、県民への浸透というものをどう情報発信していくかということと同様に、県内の各地でどういうことが起こっているか情報発信していく必要がある。

例えば、これは貴重な植物が守られていないだけではなくて、4月、5月に環境共生課の方に、十市の池にカミツキガメが見つかったとか、オオキンケイギクが非常に増えているという外来種の対策も含めて、非常に問い合わせがあったので、マスメディアに通じて、いろいろと情報発信をしているけれど、それだけじゃなかなか伝わらないものもある。

やはり、関心を持っている方、一般の方にどう情報発信をしていくかということも、これらの使用用途を含めて再構築をしていく必要があるのかなと。

多くの方に情報発信したいという思いはありつつも、それぞれの関係機関の諸事情というところで、なかなか踏み込んでいけないところがある。

そこらは、お願いベースにならざるを得ないが、いろんなところと協働しながらより多くの人に分かりやすい、そして、数字や状況を見れば今県内の生物多様性がどうなっているのか分かるような、情報発信に努めるようなプランにしていきたいと思います。

## ●公共工事等の配慮について

(細川委員)

ただ、もうどんどん生態系が壊れていってしまっている。現に工事は進んでいるが、それをなんとかストップさせたいのに、いろんな意見を聞いてからとなるとなかなか即対応できない。もちろんみんなに知ってもらおうというのは大事ですけど、県の中でこういった工業団地化が進んでいる訳ですから。県の中でのいろんな連絡、横のつながりが、一番大事と思う。

(事務局：三好課長補佐)

行動計画の取組の中でもお話しましたが、例えば、文化環境システムや環境影響評価の

ほうでは、「公共工事でこういうところは環境配慮してください」というのは、関係各課に常々伝えている。

ただ、それがやはり末端まで、例えば土木部であれば、各土木事務所まで。農業の振興部であれば、農振センターまで、しっかりとそれが広がっているかというところは、情報発信はしながらも危惧はしている。

公共工事等で先ほど言いました環境配慮が必要なところがあれば、発注事業者もしくは受注者のほうから、「貴重な動植物ではないか」と問い合わせが来るようになっている。

その場合には、牧野植物園等に問い合わせて、その地域で絶滅危惧種とレッドリストに載っているような植物ではないかというのを確認したうえで、先方には「こういう植物がありますので配慮いただきたい」という形で伝えている。しかし、なかなかそれを移植したり、場合によっては配慮するところまで進んでないのが現状。

今回のご意見でありました通り、レッドリスト以外にも当然重要なもの、地域の特性を持った物というのも、当然ある訳ですから、そういうところの情報発信がまだまだ足りないというのは反省すべきところ。そういう情報があれば随時ご連絡いただいて、環境共生課でできる限り迅速に対応していきたい。

#### ●自己評価について

(岩瀬専門員)

全体的に、自己評価がちょっと甘いと感じる。

アウトプット（実績）に対する自己評価が、成果に対する自己評価にすり替わっている感じが結構あるので、そこはきちんと正確に、「実績として計画したことは全部やりましたというのは、成果の自己評価にはならない」ということをきちんと伝えていただきたい。どうしても「全部やった」と言いたい気持ちは分かるが、成果につながってないこともあり得る。

(石川部会長)

成果がうまく書ける項目とそうじゃないところがあって、大変だとは思う。

#### ●こうち戦略の評価軸について

(事務局：内村課長)

確かに策定しましたけれども、中間に見直しもしますし、目標数値ももうすでにクリアしているチームもあるので、見直しがやはり要るのではないかな。皆様のご意見をいただきながら、評価軸も含めて見直しを考えるようにしていきたい。

26年に策定しましたから、5年ごと、ということは3年目くらいに見直しをしながら、というところも必要なのかなと。26、27、28ですから来年、再来年には、また皆さんに意見をもらいながら準備をしていかないといけないのかなと思う。

(石川部会長)

再来年あたりに評価するという心積もりで。

(事務局：内村課長)

来年、再来年あたりにもう切り替える。次の策定版も改定するような話を持っていくのが一番いいのではないか。また、生物多様性の認知度、正式なアンケートではないところから始めているので、ここら辺をどうするか。また、予算が絡んでくる。認知度についてはせめて50にはもっていききたい。

(前田専門委員)

私もそういう意見で書きました。単年度の自己評価についても、「やった」からそれはいいというのではない。認知度25、30、40に本当になっているのかと、それがないとなかなかスピードに乗らない。

分かっている人は分かっているけど、なかなか一般の方に「やはり本当にそうだね」という納得感がないと、この5年先どうしようかなと思っている。

(多々良委員)

私のほうが書かせてもらったのは少しニュアンスが違うところもある。資料2で、各部署の目標なり成果なりが並んで出てきている。これを県民に「はい、生物多様性はこういうふうに取り組んで改善しましたよ」というのは、ちょっと難しいのかなと。

生物多様性がそもそも3つあって、「生態系の多様性」、「種の多様性」、「遺伝子の多様性」という、「これが結局どうなったの」というところが本当のこうち戦略の成果だと思います。

それが、県民に見える形で示すことが今難しいのではないかと。なにか県民に示せる指標とか評価軸を考えないといけないのかなと。

端的に言えば、例えば川の魚やカニの種類とか、量と数とかが増えたとか。そういうのであれば、一般の県民も「あっ、改善したよ」と。山もそういったことが言える、植物の多様性とか自然林とか。

そういうものを端的に示すというのを5年なり10年なり長いスパンで、やはり結果を見せない。この方向性で良いのか、悪いのか。そもそも生物多様性が改善しているのか、していないのかというのが見えないのかなと。

そのためには、これを早めにつけていかないとやはり変化を見るので。最初にスタートラインを、そういう指標を押さえないと改善しているのか、していないのかが見えないなど。あまりゆっくりもできないのかなというところを書いた。

(石川部会長)

環境共生課でお持ちのデータとして、それに直接、今の多々良委員の話に関与できるような方法としては、レッドリストのアップダウン。あればすぐに使えるが、それだけだとやはり説得力がないので、自前のデータを持とうとするとかなり大変だけれども、できないことはない。レッドリストを改定するとき、それ以外の調査項目をそこに付加させて同時にやってもらうということは、たぶんどできる。簡便なサンプリングですから、ランダムにうまくサンプリングしないとイケない。それは検討しますか。

(多々良委員)

こういう視点は、他の都道府県でなにか検討とかされていないのか。

(事務局：三好課長補佐)

各自治体がどのような形で指標化されているのかというのは、まだ調査をしてない。例えば、ウミガメの上陸数とかいうのはずっととっているデータがある。

(事務局：三好課長補佐)

その魚類とか、植物とかの調査も委託事業で行っているものが当然ある。定点的なもの、県下全域、各流域でというのはなかなか作業が大変ですし、それは部会長がおっしゃられたようなレッドリストの調査のときに合わせてということにならざるを得ない。定点観測上のところで、そういう指標化ができるものもあるかと思う。

(多々良委員)

そういう今までのやっているものを使わないといけないのか。

(事務局：三好課長補佐)

これからのスタートとなりますと、やはり大変。

(多々良委員)

県民にしてみると、やはり身近な生物とか自然とかが見えてくるとずいぶん違うと思う。希少動物とかウミガメといっても、かなり縁遠い。

新しい指標作りとか取り組みを、この生物多様性の評価として考え出してやって欲しい。

(事務局：三好課長補佐)

実数でやるというのはなかなか難しいところがあると思う。多々良委員もおっしゃったように、例えば、先日カミツキガメで見つかった十市の石土池などは、もともとは在来種だけのカメだったのが、今はもうほとんどミシシippアカミミガメに変わってしまっている。在来種はまずほとんどいないだろうという状況。

例えば、それを数えてもあまり意味がない。そこに住んでいるカメの種類を数えてもさほど意味がない。例えば、あそこは確か小学校の児童が、カメの繁殖とかを環境学習にされている。やっぱりその中で、在来のカメを見つけたとか、他のカメを見つけたとかいうのを、データを取り集めて毎年のその変化を見るとかみたいなのは、実数というなんか多変量的なもので見ていかないと、数とか種類だけではなかなか押さえづらいところが、これからスタートだとあるんじゃないかなとは思う。

なにしろ、まだご意見をいただいたところですので、どういうことができるかというのは、環境共生課で少し練ったうえで、またご指導いただけたらなと思っている。

## 議題（２）生物多様性こうち戦略推進リーダー制度について

【事務局より生物多様性こうち戦略推進リーダー制度について：資料５に基づく説明】

～説明を終えて、リーダー制度についてご意見をいただく～

- リーダーの役割は「次世代を育てる」ということで、他制度との差別化をはかる
- リーダー育成マニュアル等の推進

(石川部会長)

エコラボとの差別化がまだ明確でないということでしたが、リーダーというのは、具体的に子どもたちのところで教えるというよりも、教える人を作るような役割に特化させたほうがいいのではないかと思う。

例えば、大学では大学院の学生を学部の実験のティーチング・アシスタント (TA) に使う。お金を払っているのに、学生たちの支援という意味もあるのが、教員の補助ではなくて、あれは大学院生のための教育になっている。大学院生を学部の学生に教育させることによって勉強させて伸びてほしいという制度である。教員は「こういうふうに教えないといけない」、「こういうふうに事前に勉強しないといけない」ということで、事前に指導する制度である。リーダーは、教員みみたいな役割なのかというイメージで考えている。

具体的には自分がやっている環境学習のところに、将来講師になりたいような人を募って、そこで事前の教育と、それから実際の場でのティーチングアシスタントをやらせてみるというようなイメージだと、差別化は可能だと思う。

ただし、事前に教えずにはいけないので負担は少し増える。その部分はやはりいろいろな手当が必要なのかなと思う。そういう教えるためのマニュアル作り、それをきちんと資料に整えるというような作業があるとながっていく。しっかりとした後進の教育ができるという意味では、使えるのかなと思う。

(岩瀬専門委員)

エコラボの制度もあるし、環境の杜こうちが持っている膨大な講師リストもあるし、それから高知自然学校もある。それと同じことをやってもしょうがないと思うので。大体そういうところに登録している人の高齢化がだんだん進んできていて、後進が育っていない。みんなが思っている危機感を埋めていただくというのは、非常に大きな意味がある。

(石川部会長)

やはり県の支援がかなり必要になってくるので、その辺りは少し考えていただかないと。後進を養成したいと思っている人たちも、「それなりの負担を覚悟してもいい」というようなインセンティブが、必要になってくるかなと思う。

(事務局：三好課長補佐)

インターンのように、それぞれのリーダーの活動の場に候補の方が来られて、実際に指導の仕組みというのを現場のほうで学んでいただくような仕組み。アイデアを煮詰めていく必要はあるが、県の事業としてそれを側方から支援することによって、これだったらできるかなということを手を挙げていただけたらというのが、今の段階。

(依光副部会長)

結局、単なる講師紹介だとエコラボとかと競合するのであまり意味がない。教える人を作るとか、次世代を担うリーダーとか。次世代の問題がある。

学校の先生は育っているとはいえない。一部はいるが、学校行事としてはいいけれど、それ以上のことはお断りというのが圧倒的に多い。学校の先生は結構忙しいので余裕がないこともある。

それに、一緒になってかなりやらないと分からないことが多いし、現場は週 1 回ぐらい行くので、そこでいろいろな発見が出てくる。それを身につけないと教えることはできない。ケースにもよるが、そういう意味で現場を相当知らないといけない。

(石川部会長)

依光先生の身につけたことをマニュアル化して、資料として残していただければ、3 回くらい来ればなんとか教えられるようになるのではないか。そのための資料作りにはある程度お金もかかる。

(事務局：三好課長補佐)

リーダーということで、講師、ティーチングできる人が一番の希望だが、場合によってはロジの部分というか、事務局みたいな情報収集して発信するほうが得意という方もいる。

メニューを膨らまして、いろいろなレポートリーの方を集めるというのは難しいかと思うが、より間口を広げて、今活躍されている方の後継者を、是非リーダー候補として盛り上げていきたい。

(事務局：宮地)

リーダー登録制度はリーダー登録してもらって利用（講習）するという流れはエコラボと似ているけれど、それはそれで立ち上げて、さらにリーダーを発掘する際に次世代育成マニュアルなどの事業もしていくのがいいのか。こういう登録制度はそもそも必要ないのか。

(石川部会長)

リーダー候補に挙げられている方は実際に今やっているもので、そこに TA として加わってもらってリーダーを教育するというのをくっつけたらいいと思う。付加したらいい。

(事務局：宮地)

リーダーがほかの地域に出て行って教えることもしつつ、リーダーも育てていくこともするという付加するということか。

(石川部会長)

今やっているところにリーダー候補に来てもらう。その機能を付加する。

後継者育成という付加するほうが、メインになる。

(岩瀬専門委員)

実際に講習しているところと一緒にやらないと絶対に学べないことがたくさんあるので、講習もしてもらうが、講習することがメインの目的ではなくて、次に担える人を育てることが目的として講習をやるということではないか。

(事務局：宮地)

リーダーの役割の中に、明確に「次世代のリーダーを作る」というのを入れておくということが分かった。

### 議題（3）平成 27・28 年度普及啓発事業について

【事務局より平成 27・28 年度普及啓発事業について：資料 6 に基づく説明】

～説明を終えて、平成 28 年度普及啓発事業（フォーラム）についてご意見をいただく～

（事務局：宮地）

戦略プランのキックオフフォーラムはしたので、できれば、リーダー制度・リーダーの活動のお披露目の場所にしたい。

（岩瀬専門委員）

キックオフのフォーラムは、半分以上が行政の方だった。今度は一般の市民の方が来るイベントにして欲しい。自分達がやる時の参考にしたい。

（依光副部長）

新聞・メディアもうまく使って。

（福田専門委員）

生物多様性といった場合に、特に植物が専門の方とか、動物が専門の方とか、いろいろいると思うが、普通、生物多様性というとすぐそういう個別の生物の世界になるが、産業と関係している部分というのもすごく大事。

だから、ある生物を守ろうという話と、そうではなくてやはり河川とか、あるいは山とか海とか、そういう辺りがどういうふうな形であったら本来いいのかというか、自然の生物多様性に資するか。うまくその辺りをこの会でも、あるいはフォーラム等でも扱っていくことが大事ではないかと思う。

（石川部会長）

基調講演はメインだが、サブイベントではバランスを取りながら一次産業、農業のこととか漁業のことも含めて配置していくといい。

（依光副部長）

今なぜ生物多様性かという、やはり歴史の中において大きな問題が起きてきたから。あらゆる面で 1990 年代、あるいは 2000 年ごろからもすごい大きな変化があって、物部川清流保全計画のときも大体 50 年前の川に戻そうよということで計画を作っている。その 50 年間で社会がものすごく変化したことによって、川の環境もものすごく変化して、そこに住んでいた生き物も変化してしまった。だから、その歴史的な視点をこのフォーラムにもきちっと入れてもらいたい。それで、今という時点、それから将来に向けてどうするかという、過去、現在、未来という、時間の流れが大事。ここは 50 年タームでいい。

（岩瀬専門委員）

エクスカージョンがあってもいいのかなと。前日とか翌日とか、あるいは午前、午後でもいいのですが、現場に見に行くようなものが。少し大変かもしれないけれど。そのときに、リーダーが何かをしていただけるような形でできたらいいかなと。

（石川部会長）

今出た意見なども踏まえながら、よろしくお願ひしたい。では、事務局のほうへお返しする。

【閉会】 事務局よりお礼のあいさつを述べ、自然環境部会を閉会した。